

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和6年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第6号（9月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海等への汚染防止)
(養蚕, 養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

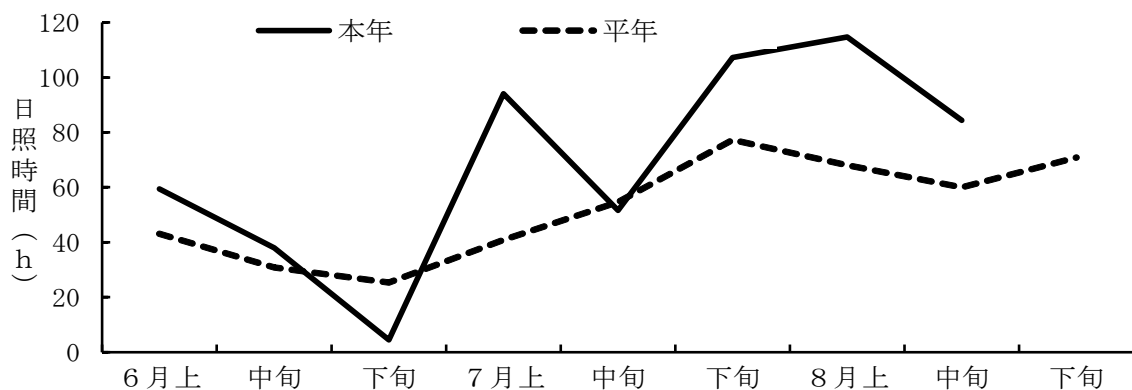
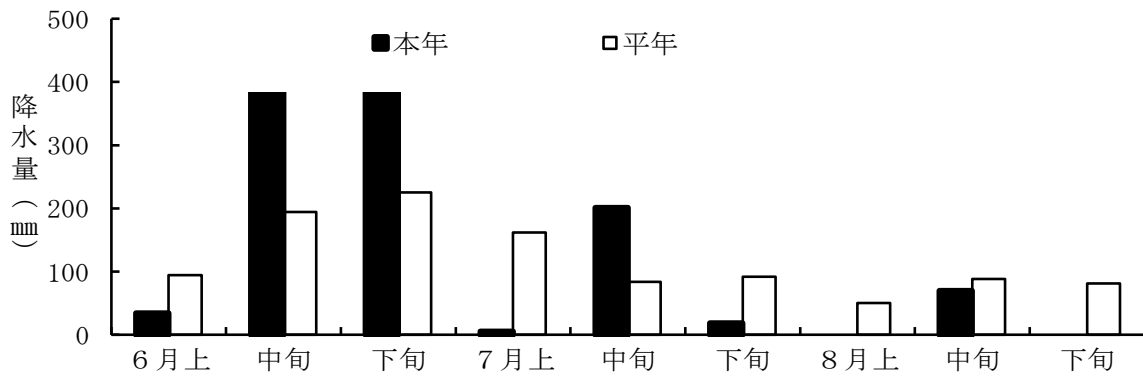
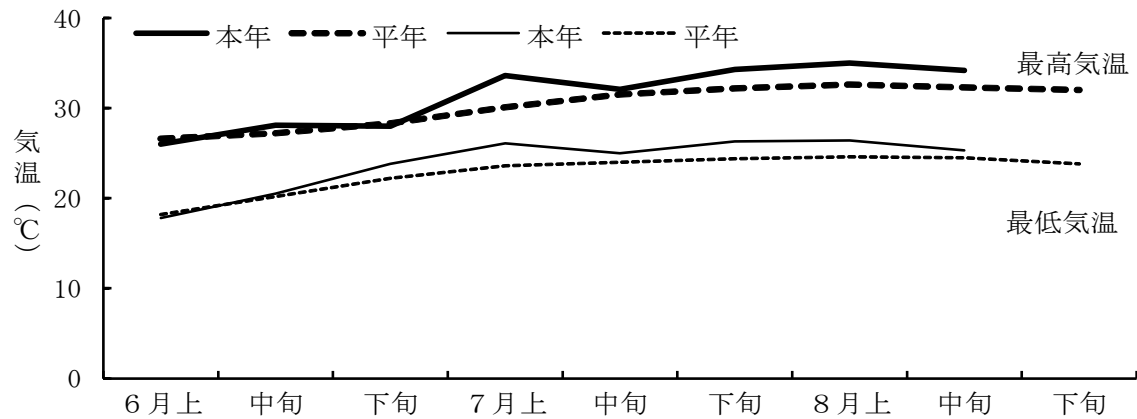
令和6年度 病虫害発生予報 第6号

令和6年8月28日
鹿児島県病虫害防除所

I. 向こう1か月の予報（8月24日から9月23日） 令和6年8月22日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	10	80	両地方とも、気温は高く、降水量は多い。日照時間は九州南部がほぼ平年並、奄美地方は平年並か少ない。
	奄美地方	10	10	80	
降水量	九州南部	20	30	50	
	奄美地方	20	30	50	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	40	20	

II. 6～8月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稲	いもち病（穂いもち）	少	少
		紋枯病	並	やや多
		トビイロウンカ	やや少	並
		コブノメイガ	多	多
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや多	多
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	炭疽病	並	やや多
		ハダニ類	やや多	やや多
	サトイモ	疫病	少	やや少
	根深ネギ	ネギハモグリバエ	—	—
花き	キク	ハダニ類（県本土：施設）	やや少	やや少
		アザミウマ類（県本土：施設）	やや少	やや少
作物・野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	並	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		黒点病（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		果樹カメムシ類	多	多
茶樹	チャ	炭疽病	やや多	多
		網もち病	やや少	並
		チャノコカクモンハマキ	少	少
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	やや少	やや少
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	やや多	やや多
		カンザワハダニ	やや多	やや多
		クワシロカイガラムシ	並	並

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病 (穂いもち)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

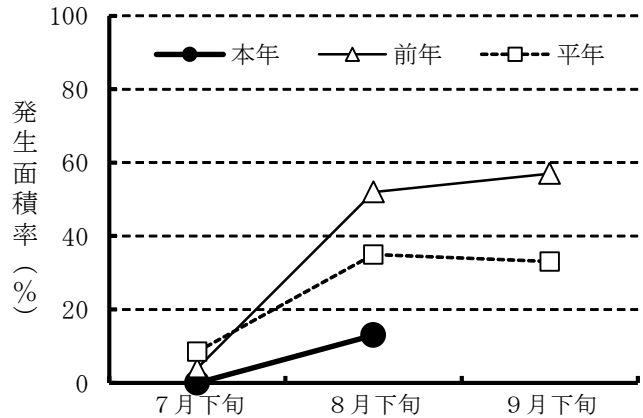
葉いもちの発生ほ場率13% (平年35%)

：低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 稲の葉に朝露が長く付着するような

山間部等で葉いもちの発生が多いほ場では、穂揃期に液剤又は粉剤で補完防除を行う。



いもち病の発生面積率 (普通期水稻)

(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

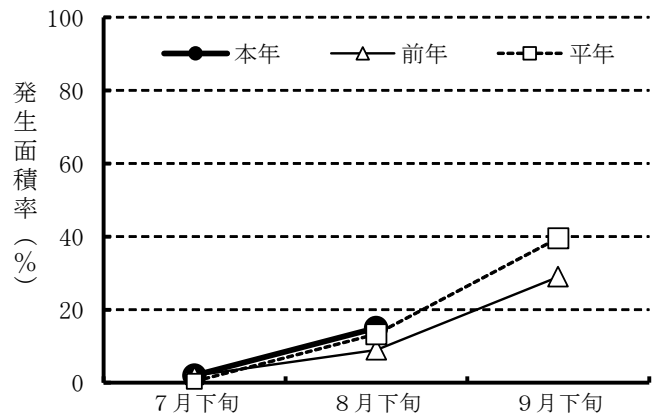
発生ほ場率15% (平年13%)：並

(イ) 気象予報 気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 現在発生が認められているほ場で出穂後も病勢が進展する場合は、早急に液剤又は粉剤で防除する。

(イ) 昨年多発したほ場では、特に注意する。



紋枯病の発生面積率 (普通期水稻)

(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

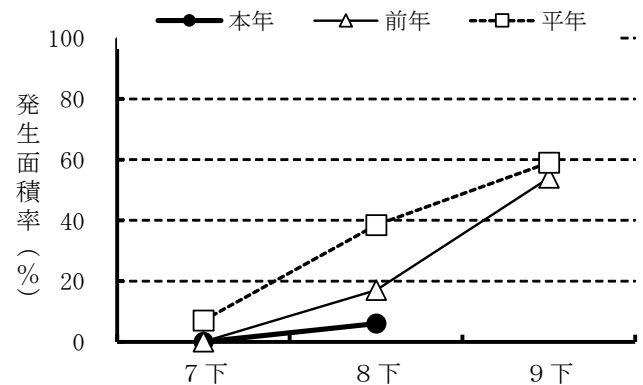
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率6% (平年39%)

：やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

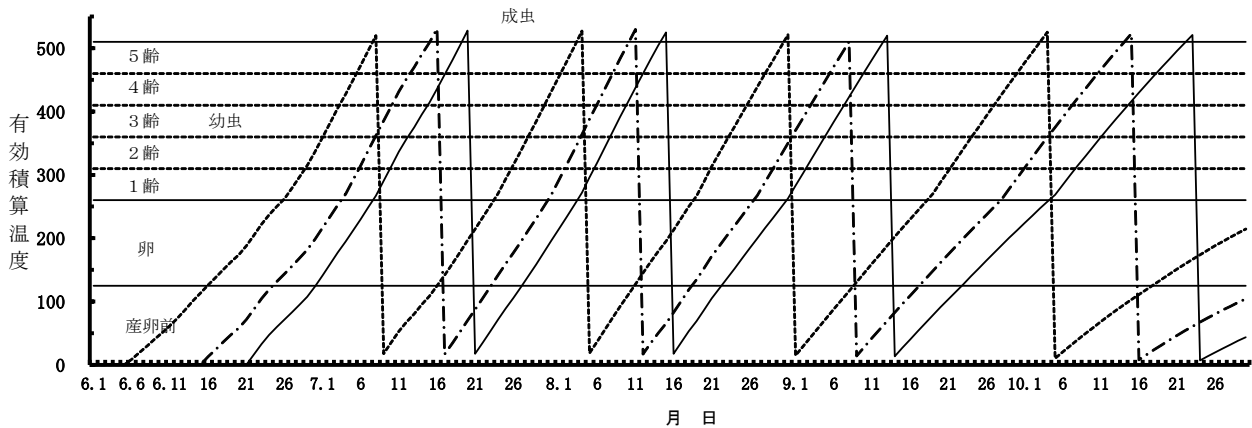


トビイロウンカの発生面積率 (普通期水稻)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 育苗箱施用剤を用いた水田でも、生息密度が急激に高まる恐れがあるので注意する。
- (イ) 防除適期については、金峰町での6月15日の飛来に由来する第3世代幼虫が8月30～9月2日頃、6月21日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月3～7日頃と予想される(図 上段)。
また、さつま町での6月17日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月4～8日頃、6/21の飛来に由来する第3世代幼虫が9月8～12日頃、6/24の飛来に由来する第3世代幼虫が9月10～14日頃と予想される(図 下段)。
- (ウ) 9月以降に出穂期を迎える中～晩生品種では、効果的な防除に努める。
- (エ) 稲の株元に生息しているので、粉剤や液剤で防除する場合は、農薬が株元に十分届くよう散布する。
- (オ) 発生状況は地域やほ場によって異なり、同一ほ場内でも生息分布にムラがあるので、ほ場全体の発生状況を必ず確認し、防除する。また、ほ場では各虫態が混在しているので、防除した後もその後の発生に十分注意する。

アメダス地点：加世田



アメダス地点：さつま柏原

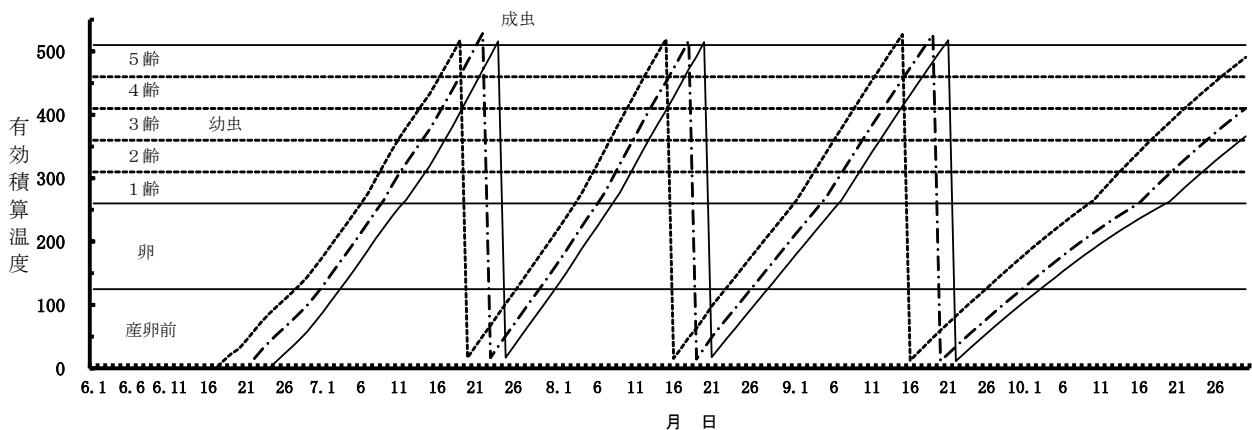


図 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、アメダスポイントデータを利用した(8/21まで実測値, 8/22から平年値)。
なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

(4) コブノメイガ

ア 予報内容

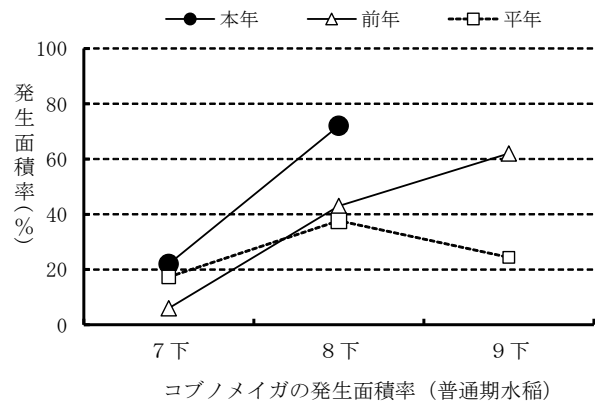
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生面積率72%（平成38%）
：やや高い
甚発生ほ場が認められた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 中晩生品種については6月25日の飛来に由来する第2世代成虫の発蛾最盛日は8月29日頃と予測され、粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の7日後に行う（図）。



アメダス地点：加世田

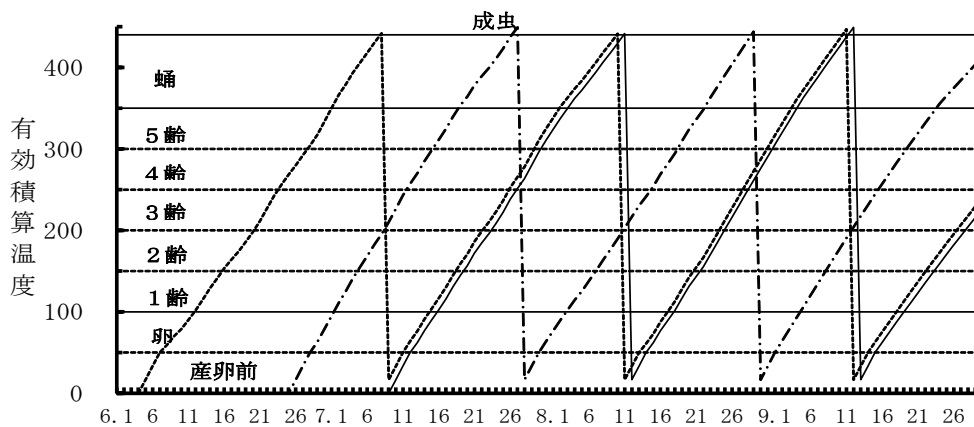


図 コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、アメダスポイントデータを利用した(8/21まで実測値, 8/22から平年値)。
なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

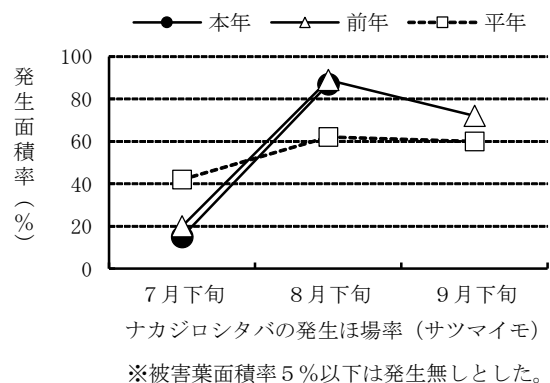
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率87%（平成62%）：やや高い（+）
- (イ) 気象予報
気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。
- (イ) 農薬散布後も幼虫の発生量が多い場合は、追加防除を行う。
- (ウ) ハスモンヨトウの発生が見られる場合は、同時防除が可能である。



※被害葉面積率5%以下は発生無しとした。

Ⅱ. 野菜

1. イチゴ（苗床：子苗）

(1) 炭疽病（令和5年度技術情報第16号（8月1日付け）参照）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平年20%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

降水量：多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。

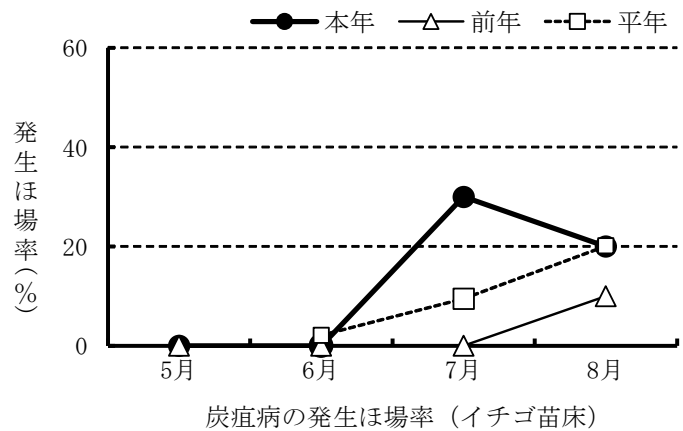
(イ) 灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、土壌の下葉へのはね返りを防ぐ。

(ウ) 子苗は通風を図るため十分な間隔を置いて並べ、過湿とならないように注意する。

(エ) 生育不良の親株や萎凋した子苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

(オ) 農薬による防除は、予防に重点を置く。予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(カ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率50%（平年42%）：並

発生程度の高いほ場を認めた（+）

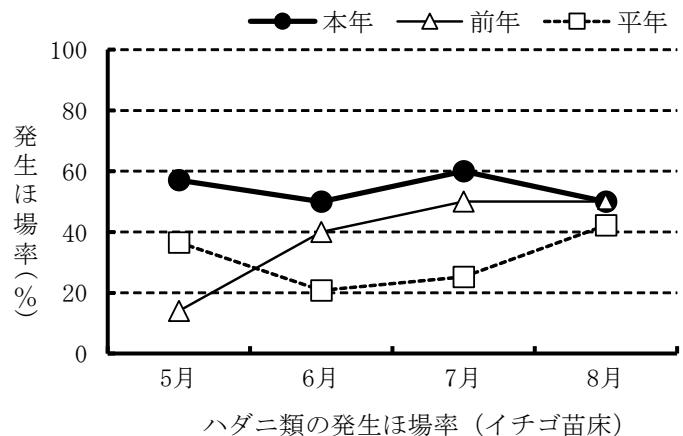
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏までかかるよう散布する。

(ウ) 農薬によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する（令和4年度技術情報第9号（11月29日付け）参照）。

(エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率 20% (平年62%)
：低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

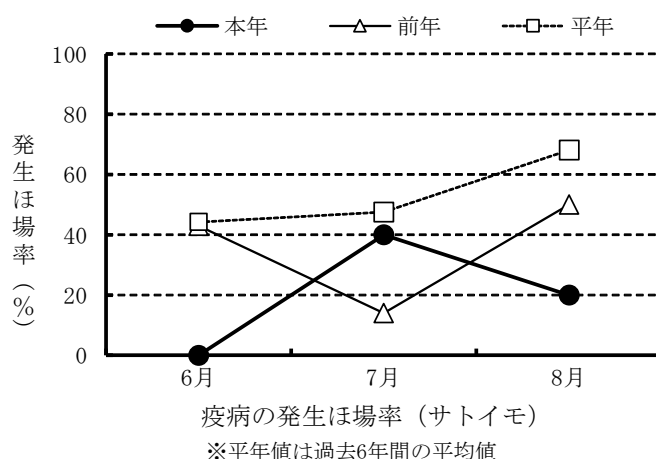
(ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。

(イ) 台風や継続した降雨によって、急激に発生が拡大する。特に台風後はほ場の見回りを行い、発生を確認したら直ちに治療効果のある農薬を7日間隔で複数回散布し、防除を徹底する。

(ウ) 発病茎葉は発生源になるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

(エ) 収穫後のくずいも・親いも等の残渣は、ほ場や周囲に残ると発芽して翌年の発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。また、茎葉等の残渣は早めにすき込み分解させる。

(オ) 防除する際は収穫までの日数等を確認し、安全使用基準を遵守して防除する。



3. 根深ネギ

(1) ネギハモグリバエ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 -

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 -
発生ほ場率50% (平年：-%, 前年：-%)
発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 県内各地で、多数の白色食害痕により葉の白化症状を呈するB系統の発生が確認されている。発生を認めたら、初期防除を徹底する。

(イ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

(ウ) 本虫の寄生した被害葉及び収穫残渣をほ場に残すと、次の作型や周辺作物の発生源となるので、地上部に残らないよう処分を徹底する。

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30%（平年40%）

：やや低い（－）

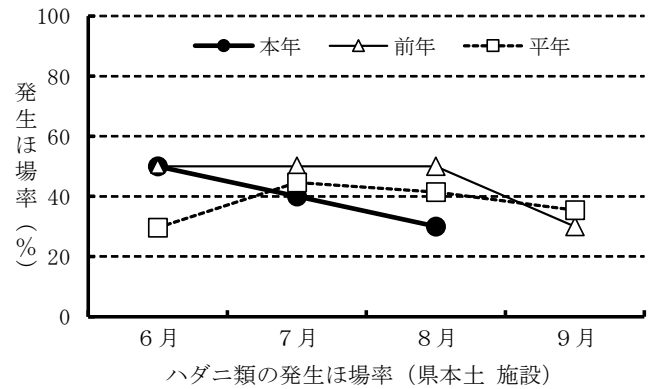
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30%（平年39%）

：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 8月中下旬の巡回調査では主要種はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマであった。アザミウマ類の発生動向を把握するには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

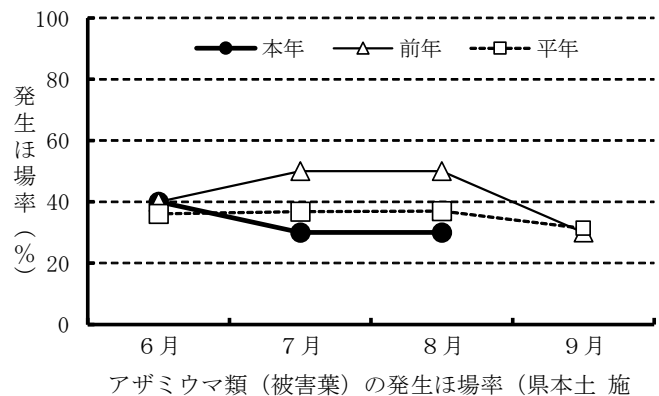
(イ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(ウ) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(エ) クロゲハナアザミウマの発生が認められる場合、本種は主に中下位葉に寄生しているため、薬液は中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生に注意する。



IV. 作物・野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サツマイモ、イチゴ、サトイモ、根深ネギ、キク等
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
サツマイモ	27	2	多
イチゴ	0	12	やや少
サトイモ	90	77	やや多
根深ネギ	8	-	-
キク	0	3	やや少

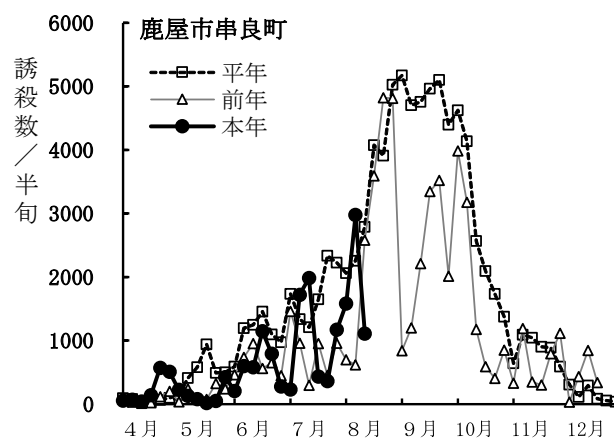
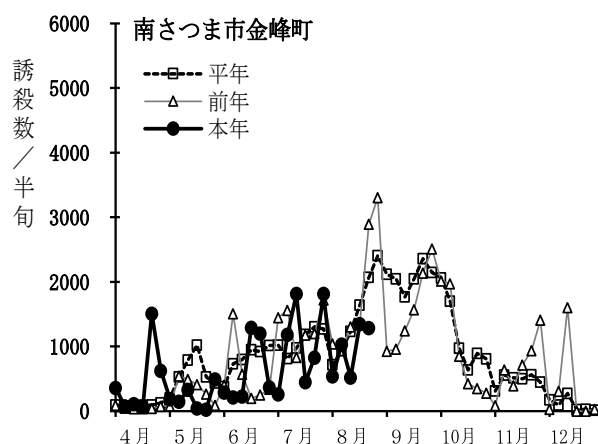
フェロモントラップ誘殺数：並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生の日安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況

V. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

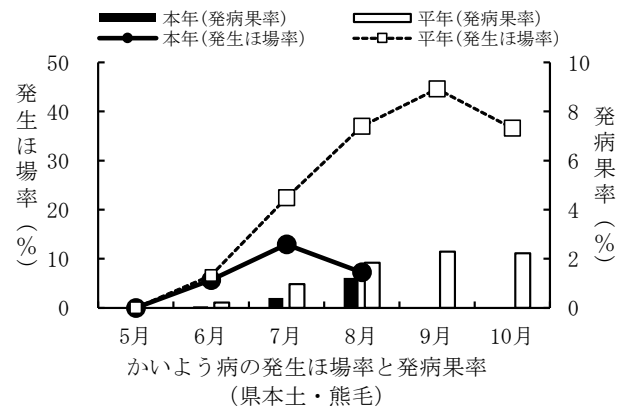
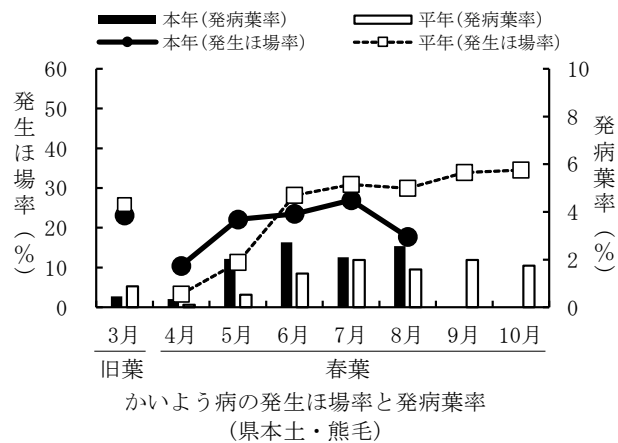
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	少
発生ほ場率	18% (平年 30%) : やや低い (-)	7% (平年 37%) : 低い (-)
発病率	2.6% (平年1.6%) : やや高い (+)	1.2% (平年1.8%) : やや低い (-)



(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	0% (平年 1%) : 並	14% (平年 17%) : 並
発病率	0% (平年0.01%) : 並	0.1% (平年0.3%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、本種の防除を徹底する。

(イ) 台風の風傷害により発生が助長されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 19% (平年 42%)

: 低い (-)

発病果率 0.8% (平年 7.2%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 14% (平年 3%) : 高い (+)

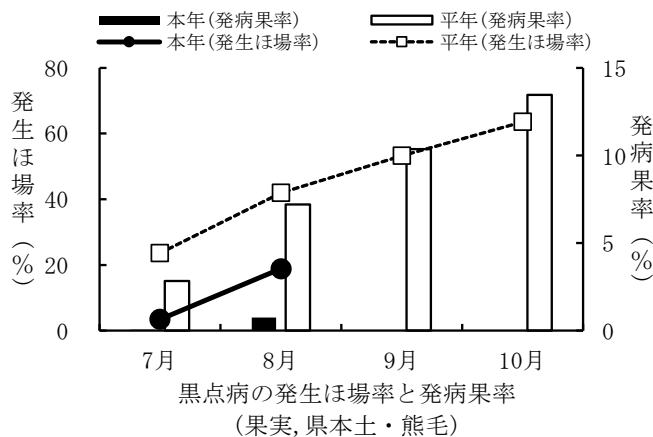
発病果率 0.1% (平年 0.04%) : やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 9月の秋雨で発生が助長されるので、多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 農薬の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。

(ウ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 27% (平年 24%) : 並

寄生葉率 2.8% (平年 4.5%) : やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：やや多

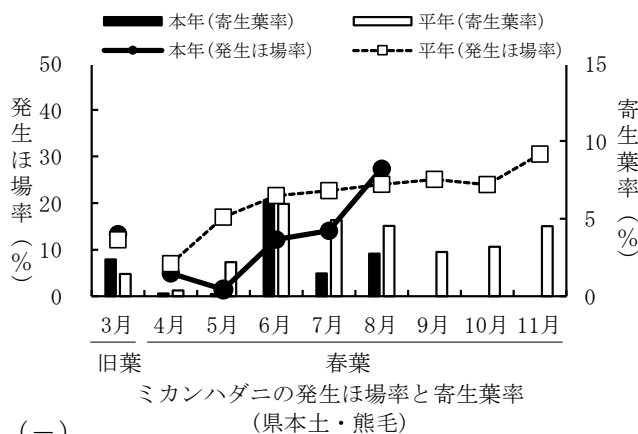
発生ほ場率 14% (平年 3%) : やや高い (+)

寄生葉率 2.6% (平年 0.4%) : 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%)を目安に防除する。

(イ) 作用性の異なる農薬(RACコード参照)のローテーション散布を行う。



(4) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

(令和6年度技術情報第9号(5月10日付け), 第18号(8月19日付け)参照)

(令和6年度果樹カメムシ類予察灯誘殺虫数(6月18日現在)速報 参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 ツヤアオカメムシ 多
チャバネアオカメムシ 並

ヒノキ球果の口針鞘数(吸汁痕数) 13.0本/果 (平年10.0本/果)

出水市美原町の予察灯での誘殺虫数は, ツヤアオカメムシでは4月から増減を繰り返しながら平年より多く推移している。

表 ヒノキ球果の口針鞘数(カメムシ類の吸汁痕数) (単位:本/果)

調査地点	調査月日			
	7月1~4日	7月19日	8月1~2日	8月14日
南さつま市	0.7	1.7	6.0	7.2
いちき串木野市	0.6	4.7	9.0	9.4
阿久根市	0.5	2.8	4.6	13.2
出水市①	0.5	5.5	16.8	19.2
出水市②	3.1	7.4	14.5	19.0
さつま町	2.4	3.3	6.8	17.5
霧島市	0.3	6.1	6.5	11.2
曾於市	0.0	0.3	4.4	7.7
本年	1.0	4.0	8.5	13.0
平年	0.4	2.5	6.3	10.0

注1) 平年は, 2014~2023年の10年間の平均値

2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は, 口針鞘数25本/果

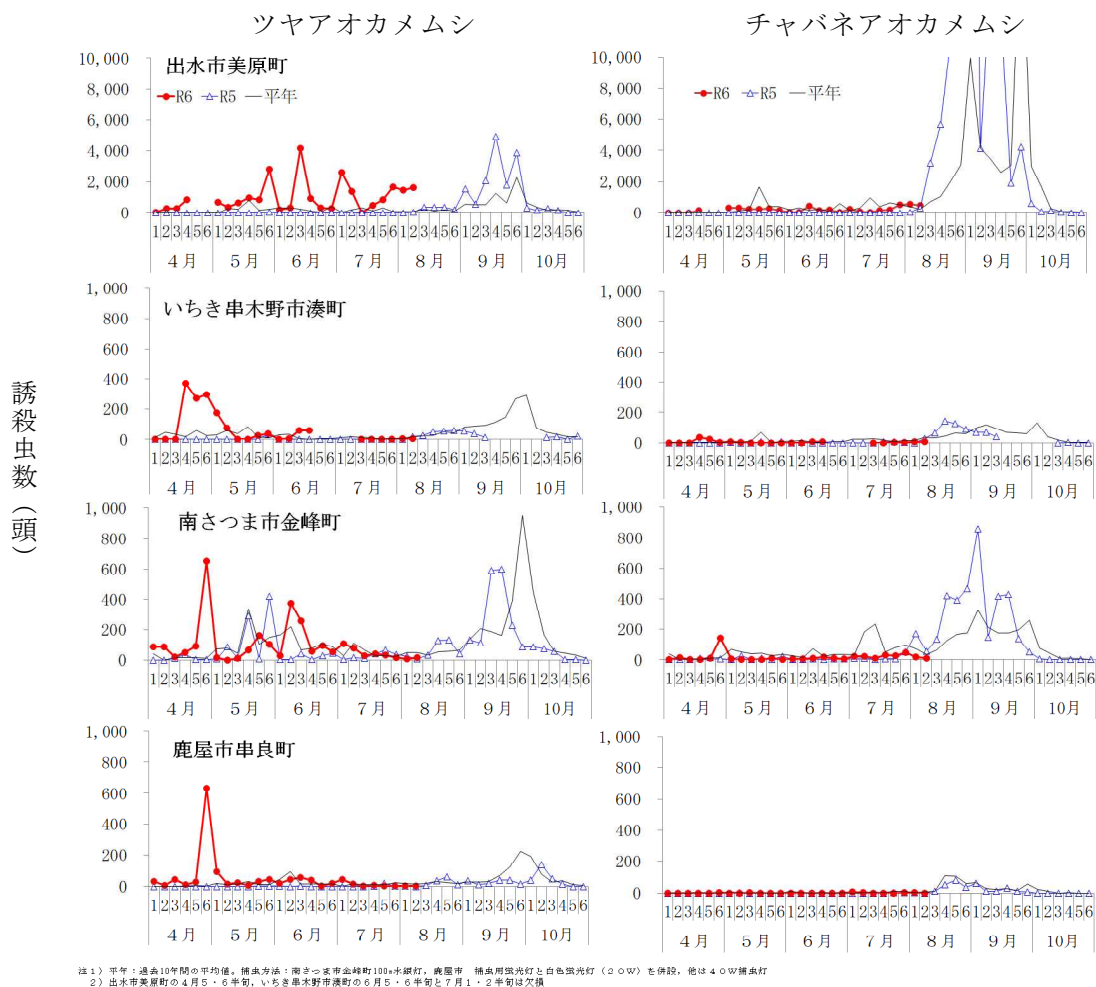


図 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 果樹園への飛来はほ場により異なり、園内でも偏りがあるので注意深く見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
- (イ) ヒノキ球果の劣化や台風等により球果が落果すると、成虫が果樹園へ飛来する場合がありますので注意する。

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) ゴマダラカミキリ

- ア 成虫の活動がにぶい朝夕の時間帯に捕殺する。
- イ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
- ウ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断(ストックカバー法)すると、成虫の産卵を防止できる。

(2) サビダニ類

- ア 昨年多発したほ場では発生する機会が多いので、防除に努める。
- イ 秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

(3) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

- ア 幼虫の食草(アケビ、ムベ、アオツツラフジ等)除去や夜間の成虫捕殺、防蛾網(7.5~10mm目)を設置する。
- イ 恒久的な対策として、黄色忌避灯を主体とした集団点灯を行う。

VI. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率62% (平年55%)

: やや高い (+)

1 m²当り病葉数8.0枚 (平年6.3枚) : やや多 (+)

(イ) 気象予報

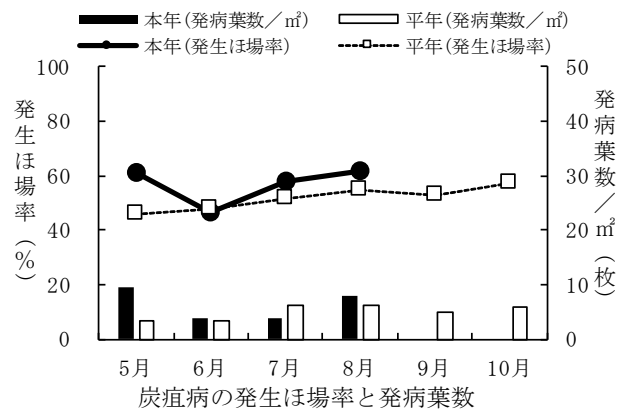
降水量：多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽萌芽～1葉期に予防剤を散布したほ場では、3～4葉期に治療剤を散布する。

(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤を散布していないほ場では、2～4葉期に予防剤と治療剤の混用散布を行う。

(ウ) 伝染源の病葉が少ないほ場でも、長雨により多発する恐れがあるので防除を行う。



(2) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0% (平年1%)

: やや低い (-)

1 m²当たりの病葉数0枚 (平年0.03枚)

: やや少 (-)

(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除が可能である。

(ウ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い品種では防除に注意する (下表参照)。

(エ) 本病は空気伝染するため、更新園であっても周辺に発生ほ場がある場合は防除を行う。

(オ) 常発園では、秋芽生育期後半に銅水和剤による追加防除を行う。

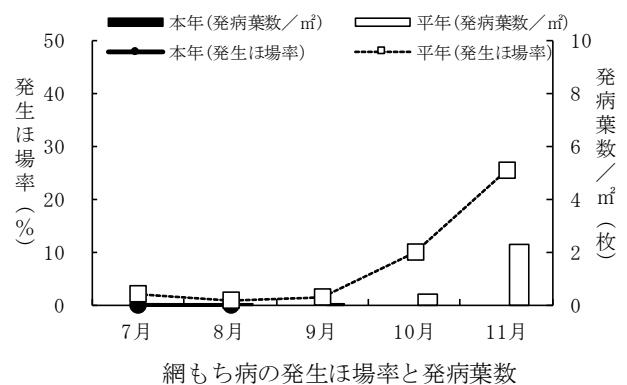


表 県奨励品種の炭疽病と網もち病の耐病性

		炭疽病 ^(注1)			
		弱	中	やや強	強
網もち病 ^(注2)	弱	やぶきた	あさのか	あさつゆ かなやみどり	
	中				
	強				ゆたかみどり
	不明	おくみどり	さえみどり はるもえぎ	くりたわせ はるみどり	

注1) 炭疽病は茶大百科 I 主要品種と栽培特性より引用, 2) 網もち病は, 江塚, 1958を一部改変

(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

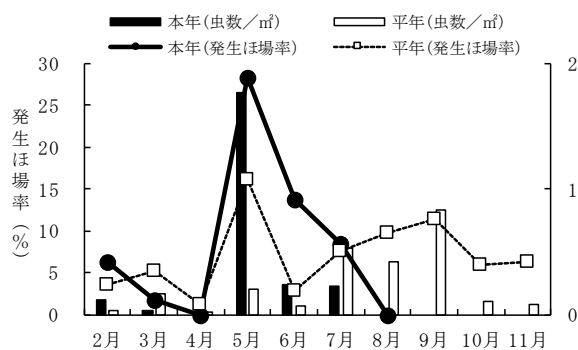
ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 少
 チャハマキ やや少

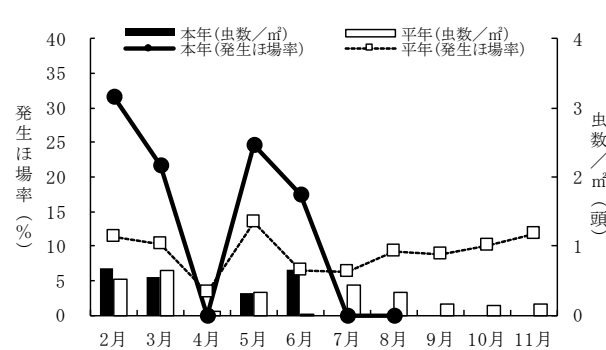
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

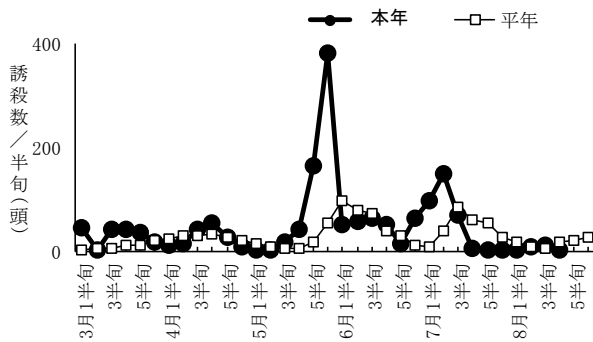
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	少	やや少
発生ほ場率	0%(平年10%):低い(-)	0%(平年9%):やや低い(-)
虫数(1㎡当たり)	0.0頭(平年0.4頭):少(-)	0.0頭(平年0.3頭):やや少(-)
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数(7月第5半旬～8月第4半旬)	30頭(平年135頭):少(-)	3頭(平年49頭):少(-)



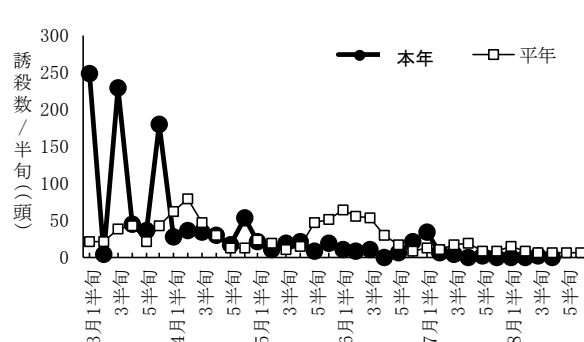
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)



チャハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 農薬防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期(発蛾最盛日の10～15日後)である。
- (イ) チャハマキのジアミド剤に対する感受性の低下を認める地域があるので、地域の栽培暦を参考にして農薬を選択する。
- (ウ) チャハマキは、夏期より秋期に発生が多い傾向にあるので発生に注意する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

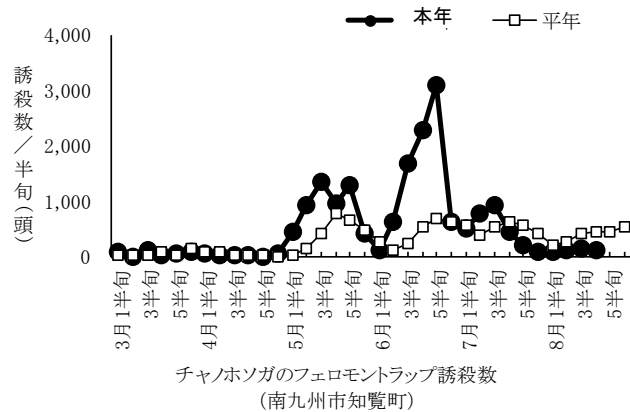
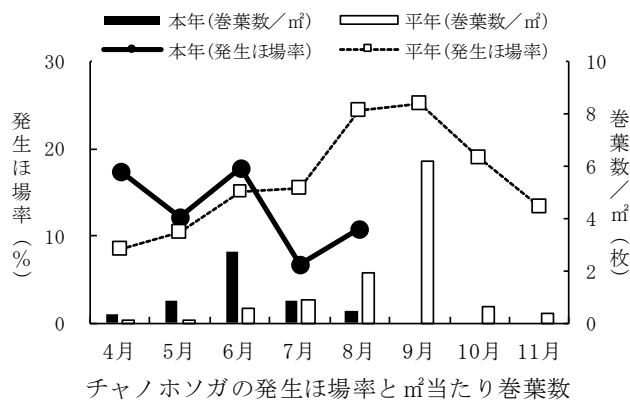
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率11%（平年24%）
：やや低い（-）
㎡当たり巻葉数 0.5枚（平年1.9枚）
：やや少（-）

<南九州市知覧町フェロモントラップ>

誘殺数（7月第5半旬~8月第4半旬）
777頭（平年2,321頭）：少（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。
- (イ) IGR剤及びジアミド剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦を参考にして農薬を選択する。



(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

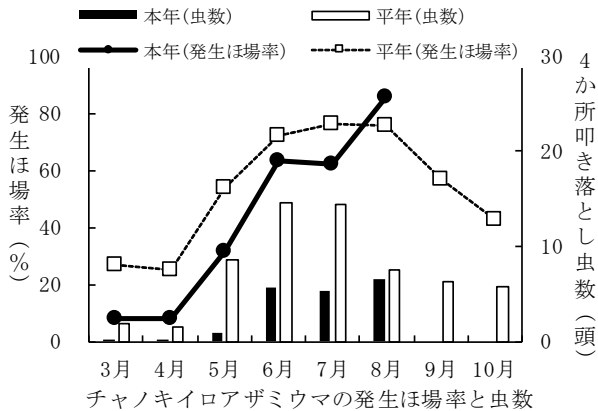
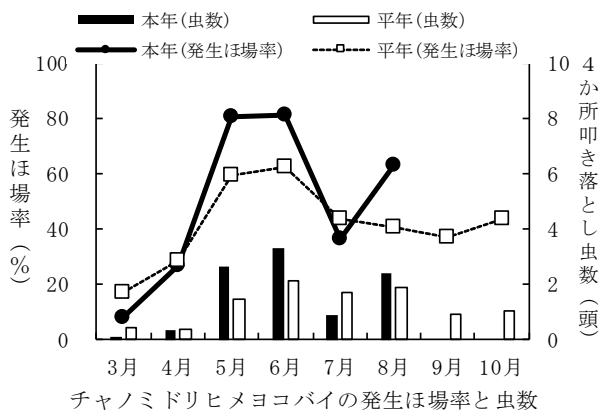
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	やや多
発生ほ場率	63% (平年 41%) : 高い (+)	85% (平年 76%) : やや高い (+)
虫数(4か所叩き落とし)	2.4頭(平年1.9頭) : 並	6.4頭(平年7.6頭) : 並



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いいため被害が継続し、樹体への影響も大きいので、芽の生育状態に合わせた防除を心がける。

(イ) チャノミドリヒメヨコバイの秋芽被害は翌年の一番茶への影響が大きいので、秋芽生育期に防除する。

(6) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
(イ) 発生量 やや多

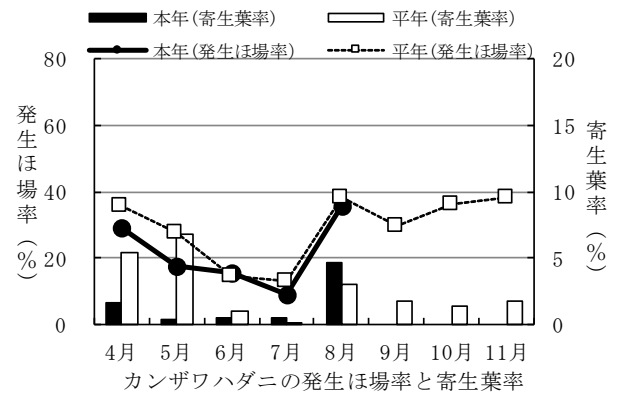
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率 36% (平年 39%)：並
寄生葉率 4.7% (平年 3.1%)
：やや高い (+)

発生程度の高い園地がある (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。
(イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。



(7) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

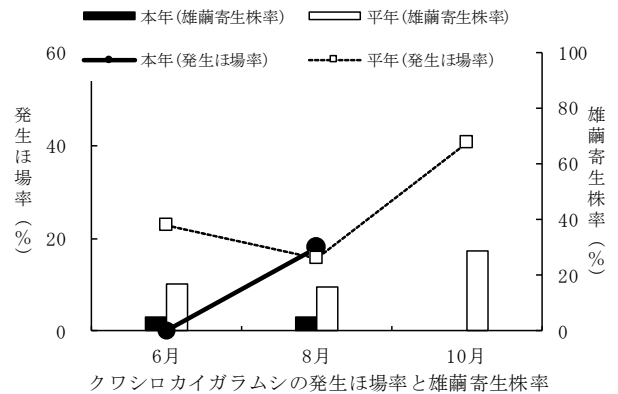
(ア) 発生地域 県本土
(イ) 発生量 並
(ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 18% (平年 16%)：並
雄繭の寄生株率 5.3% (平年 16%)
：やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。
(イ) 農薬は、ふ化最盛日から5日以内に枝や株元に十分かかるように散布する。
(ウ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく、高い効果が期待できる。



防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意するとともに、摘採前日数を遵守する。また、摘採前であることを知らせる「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる等、ドリフトによる事故が起こらないよう十分に注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園では、芽の再生が園によって異なり生育期間も長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（炭疽病、輪斑病、新梢枯死症、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ等）を適切に行う。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を用いている。